

● テーマ ●

ベトナムの習慣と信仰を古典文学に探る

Classical Literature as a Source of Vietnam Faith and Convention



2012年1月17日（火）

● 発表者 ●

グエン ティ オワイン

NGUYEN Thi Oanh

ベトナム社会科学院 准教授

国際日本文化研究センター 外国人研究員

Associate Professor, Vietnam Academy of Social Sciences

Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies

発表者紹介

グエン ティ オワイン

NGUYEN Thi Oanh

ベトナム社会科学院 准教授

国際日本文化研究センター 外国人研究員

Associate Professor, Vietnam Academy of Social Sciences

Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies

略 歴

平成 16 年 10 月 博士（文学、ハノイ師範大学）
平成 22 年 11 月 ベトナム社会科学院 准教授
平成 23 年 6 月 国際日本文化研究センター 外国人研究員（～平成 24 年 6 月）

著書・論文等

『錦亭詩選集』（社会科学出版社、2011 年）
『国史遺編』（社会科学出版社、2010 年）
『日本靈異記』（ベトナム語訳、文学出版社、1999 年）
「ベトナムと日本との外交関係——漢喃研究所が所蔵している文献を中心に」（『アジア文化と琉球』2010 年）
Peter Kornicki and Nguyen Thi Oanh, “The lesser learning for women and other texts for Vietnamese women: A bibliographical and comparative study,” *Asian Studies*, Cambridge University Press, 2009. (英語)
「ベトナムの漢文説話における「鬼退治」のモチーフに関する比較研究」（『世界文学の中の日本文学——物語の過去と未来』第 32 回国際日本文学研究会会議録、人間文化研究機構国文学研究資料館、2008 年）
『日本昔話事典』について（『文学研究』10 号（428）、2007 年）
「ベトナム漢文説話における「雷神退治」のモチーフについての比較研究」（『アジア遊学』114（特集東アジアの文学圏）、勉誠出版、2008 年）
「漢字・字喃研究院所蔵文献」（清水政明訳、『文学』第 6 巻第 6 号、2005 年）

ベトナムの習慣と信仰を古典文学に探る

はじめに

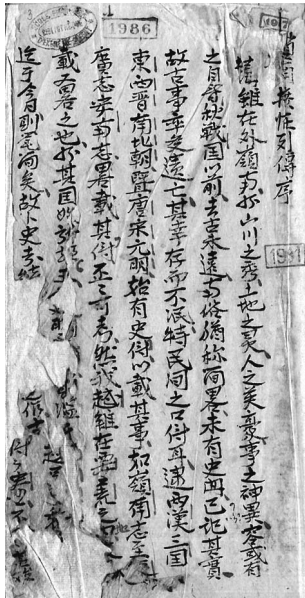
日本や朝鮮（韓国を含む）と同様、ベトナム人は表記文字として漢字を使用してきました。ベトナムの古典文学とは、漢字・字喃チュイナムで書かれた古い文学を意味しています。漢字がベトナムに伝来した時期について具体的に記した文献はいまだ見つかっていませんが、考古資料によると、紀元前二〇七一―一三七年には既にその存在が認められます。しかし、本格的にベトナム人が勉強や記録の手段として漢字を使うようになるのは紀元後です。七世紀から九世紀にかけて、漢語・漢字が徐々に広まり始め、十世紀半ばに中国から独立した後も、依然として民族文化の保存と発展に有効な記録手段として使用され続けました。こうして、十世紀以上にわたって用いられてきた漢字は、ベトナム民族の文化的生活のあらゆる側面を映し出しています。ベトナム民族は、質量ともに充実した漢字・字喃文献を残してきた

おり、これらはベトナム民族の精神文化を理解する上で、欠かすことのできない史料と言えるでしょう。

しかし、二十世紀になると、表記のための文字として、漢字・字喃に代わり、クオックグー（国語）が採用されるようになり、漢字・字喃が使える人はだんだん少なくなってきました。一九六〇年代になると、漢字・字喃で記された文献は古典と見なされ、これを現代ベトナム語に翻訳して古典文学の教科書が作成されるようになります。

ベトナム古典文学研究の主要な対象は、ベトナム社会科学学院・漢喃研究院ハンナムの図書館が所蔵する漢籍および字喃書籍です。しかし、研究院が所蔵する資料（主にフランス極東学院（E.F.E.O.）の図書館から引き継いだもの）は、まだほとんど整理されていません。その背景には、フランス極東学院が一九〇一年に図書館を設立した後、古書買上政策と写本作業により、漢喃テキストの状況がより複雑化してしまったことがあります。

従来の古典文学の翻訳・出版作業は、学術情報をできるだけ早く提供すべしという需要には応えていたのかもしれませんが。しかし、原本、異本を十分に吟味しないままに出版することで、事実在即した研究成果が得られない可能性があり、また誤解が起る可能性すらあります。テキスト批判は専門性の高い作業であり、研究に基づく根拠が必要とされ、漢字・字喃が読めれば誰でもできるという類のものではありません。しかも現在、ベトナム



『嶺南摭怪』
 (ベトナム社会科学院漢喃
 研究院図書館蔵、A.2914)

ムのほとんどの文学研究者は漢字・字喃を読むことができず、資料に直接アクセスするの
 が難しい状況にあります。このような状況において、正確かつ忠実に現代ベトナム語で漢
 喃テキストの内容を伝えることは、極めて重要です。

本研究の中心となる『嶺南摭怪』^{れいなんせきかい}は、^{リー}李朝、^{チヤン}陳朝期(二一—一四世紀)に成立したベト
 ナム最古の漢文説話集です。ベトナムの神、聖、僧、異類などについての説話二十二編が
 収められており、竜の精と仙人の結婚などの、^{フンソウオン}雄王の祖先に関する話、殷の侵略軍を三歳
 の子供が巨人となつて打ち破る話、また、山の精と水の精が争う話などが典型的です。そ
 のほとんどは、神が賊を平定し、国難を除く手助けをし、この功により神が位階を奉られ

るといふ構成になっています。
 ベトナムの多くの昔話は『嶺
 南摭怪』によつて有名になつ
 たものであり、『嶺南摭怪』は、
 文学にとどまらず、歴史や習
 慣、信仰などを理解する上で
 欠かすことのできない資料と

言えるでしょう。

筆者は十年前からこの『嶺南摭怪』を研究し始め、これまでに十五の異本を収集・校訂し、博士論文においてはどれが古いテキストかを明確に論じました。そのうち最も古いと思われるもの（漢喃研究院の図書番号ではA.2914）は、従来の通行本とは違うものでした。そこで今回は、この新資料を繙きながら、ベトナムの習慣、信仰についてご紹介したいと思います。

なお、今回の発表では『嶺南摭怪』以外のテキストも、漢喃研究院が所蔵する資料を使用しています。また、諺と歌謡は『ベトナム人の民間文学総集』¹から引用したものです。比較資料として、『今昔物語集』²（本朝部のみ）を使用します。

以下では、先行の業績を継承しつつ、『嶺南摭怪』(A.2914)に記されているベトナムの結婚式、正月行事、葬式について紹介していきます。特に注目されるのは、「傘円山伝」、「金亀古伝」、「檳榔古伝」、「チュン餅古伝」などのテキストです。また、これらが、現在語られている昔話と比較してどう違うかを明らかにしたいと思います。もちろん、お正月以外にも、ベトナムには年中行事として、三月三日の「声明」、五月五日の「端午」、七月十五日の「お盆」、八月十五日の「中秋節」、十二月二十三日の「かまど神」（荒神）、十二

月三十日の「大晦日」など、日本とも比較すべき行事がありますが、今回は残念ながらも言及できません。また、ベトナムの葬式についても古典資料からお話ししますが、図版がないため、現在ベトナムで行われている葬式の写真を使用します。

比較対象は主に日本ですが、いまだ勉強不足であり、これまでに身に付けた知識と経験だけを利用します。また、葬式については、現在のベトナムでの葬列に類似したものでして、『今昔物語集』に見られる葬列を取り上げ、比較したいと思います。

一 『嶺南撫怪』『雨中随筆』から見たベトナムの結婚

結婚は、種族と「家」の秩序を維持するための重要な儀礼です。ベトナムの伝統的な結婚儀礼がどうなっていたかについては、ファン・ジン・ホー (Pham Dinh Ho) (一七六八—一八三九) によって書かれた『雨中随筆』(図書番号 A.1279)⁽³⁾ が参考になります。彼によれば、結婚式を初めて行ったのは中国の伏羲 (紀元前二八〇〇年) で、結婚儀礼は『周礼』と『礼記』に見られます。『雨中随筆』にはベトナムの伝統的な結婚式についての具体的な説明はありませんが、その記述からある程度の推測をすることは可能です。

わが国には、王公、卿将をはじめ、官職、庶民など上中下の皆が関わる婚礼の儀式

が三つあります。一つ目は「聞名」（名前を聞く式）、二つ目は「納聘」（結納式）、三つ目は「親迎」（花嫁を迎える式、つまり結婚式）です。（抄訳）

つまり、結婚儀礼には三つの段階がありました。最初は嫁の名前を聞く式で、仲人が嫁の家に行き、嫁の名前と誕生日を聞いた上で婿の家に伝えるもの、次は結納式で、婿の家が結納を納めるもの、最後は花嫁を迎える、つまり結婚の式、といった段階です。

現在のベトナムにおける一般的な結婚儀礼にも、三つの式があります。一つ目は嫁の家族への訪問式です。二つ目は結納式で、婿の家族が嫁の家族に要求された結納を持つていきます。さらに両方の家族が親戚や友人、知人に正式に子供の結婚を発表します。三つ目は結婚式であり、伝統的には家でとり行われます。訪問式より結納式の方が正式なもので、ベトナムの結婚慣習の特徴としては、結納式における結納要求があります。

一—— 結納要求はいつから始まったのか

結納要求について初めて記載されたテキストは、『嶺南撫怪』に収められている「傘円山伝」です。その内容を紹介します。

ヴァンラン

文郎国（ベトナム古代の国）

第十八代雄王

フンツオン

には、娘がいました。名を媚娘といいま

した。その美しい娘の噂は遠く南国まで広がっており、求婚してくる男性が多かった。雄王は婿選びを行うことにしました。数日を経て、二人の男が求婚に来ました。一人は水晶といい、もう一人は山晶といいました。王は二人の才芸を試み、競争するよう要求しました。山晶が山を指すと、山が忽ち崩れました。岩に入ったたり出たりするのも自在です。水晶が水を吸い、空に嘖くと水が忽ち風、雲、雷、電に化しました。それをみた雄王は、「お二人の才芸はいずれも見事であるが、朕には娘が一人しかいない。どなたに嫁をやるべきか。どなたか先に結納を納めた方が勝ちとしよう。即ち嫁をやるう」と言いました。山晶が先に来て媚娘を嫁にし、傘円山に迎えて、夫婦になりました。水晶は遅く来たために嫁にできず、これを怒って、水族を連れて山を攻撃しました。この後、二人は敵同士となりました。今でも、六月か七月には、水晶が洪水を起こして、山晶を攻撃すると語り伝えられています。（抄訳）

これはベトナム人の治水の思想を反映した伝説ですが、ここに結納を要求する習慣も記されています。結納要求の習慣がいつから始まったかは分かりませんが、この話が起源ではないかと考えられます。また、結納品が具体的に何であったかはここには書かれていま

せんが、後世に成立した昔話には、結納品についても具体的に書かれています。

雄王は「九つの象牙の象、九つの鶏冠を持つ鶏、九つの紅い鬘の馬」と言って、結納を要求しました。山晶はそれらを簡単に手に入れ、いち早く結納を納めて媚娘を嫁にしましたが、水晶は水に住んでいるからそれらを準備するのが難しく、結納を届けるのが遅かったので、嫁にできませんでした。(抄訳)

また、ベトナム人には次のような諺があります。“Con gái là con người ta, Con dâu mới thực mẹ cha mua về.”「娘は他の人の子どもだ、嫁は本当に父母が買った子どもだ」(つまり、娘は結婚後、実家のことに代わり、婿家のことと責任を持つ。また、婿家が結納としてお金を納めるのを、「買った」とたとえる)。このように、結納は昔から求婚のさいに必要でした。婿の家族は、嫁の父母に恩返しをするために、婿方から嫁方へ結納を納めるものとされました。日本人と同じく、結納は家柄などによって品目、数量が異なりますが、通常、農村では米、豚、酒、タバコ、檳榔^{ビンロウ}、お金、都会では檳榔、「夫妻」という餅、炒ったもち米、茶、蓮の実のジャム、タバコ、お金です。



檳榔（左側実の部分）とキンマ（右側葉の部分）（著者撮影、以下の写真も同じ）

一―二 結納に欠かせないものは何か
結納の金額や内容は家によって異なりますが、檳榔（ヤシ科の植物）は欠かせない結納品です。

檳榔の種子（檳榔子）を噛むことは、ベトナムを含むアジアの広い地域で行われていま⁴す。檳榔について初めて記されたテキストも、『嶺南撫怪』に収められています。その「檳榔古伝」を見てみましょう。

「檳」と「榔」は両親を早くに亡くした兄弟です。「檳」は兄で、「榔」は弟です。兄弟は道士に学問を教わっていました。道士の家には美しい娘がいました。娘は二人の兄弟を見て、ひと目で好きになりました。彼女は兄を選び、両親に、兄に求婚したいと話しました。両親の同意を得て、彼女は兄と結婚しました。最初は三人で楽しく過ごしていましたが、弟は、兄が妻を愛していることや、自分に対して昔ほど優しくしてくれないことがいやになって、家を出て、別のところに行こうとしました。途中で河がありまし



「檳榔」は欠かせない結納品

た。橋もなく、船も見あたらないので、弟は河岸に座り込み、泣いて死んでしまい、そして檳榔の木になりました。兄は弟の姿が見えないので、早速探しに行き、その木の近くにいた村人に尋ねました。兄はその木が弟の化身だと知ると、木の根に頭を打ちつけて死に、キンマの蔓になつて、木に巻き付きました。妻は夫の姿が見えないので、探しに行き、兄弟が化身した檳榔とキンマにたどり着きました。檳榔とキンマの由来を聞くと、妻もまた木の根に頭を打ちつけて死に、石になりました。雄王が各地を巡幸したとき、檳榔とキンマと石があるところに立ち寄りました。雄王は村人にこれらの由来を聞き、三人の家族の愛情と恩義に感動しました。従者が檳榔子やキンマの葉を摘み取り、一緒に噛んで石に吐くと、唾液が紅くなりました。雄王は、「今後、祭りや結婚式などのめでたいとき、また、葬式などの悲しいときに、これらを儀礼の品として採用するように」と命じました。(抄訳)

一九六〇年に現代ベトナム語に翻訳・出版された『嶺南撫怪』（漢喃研究院図書番号A33）や、現在書店で販売されているベトナムの昔話と比較すると、異なるのは三人の化身です。一九六〇年刊の方では、亡くなった弟は檳榔の木に化身しています（ここで挙げた話と同じです）。ところが、蔓になったのは妻の方で、夫は石に化身しています。ベトナムの昔話の方では、弟は石に、夫は檳榔の木に、妻は蔓に化身しています。

ここでは、漢文説話と字喃資料を編纂する時に、時代によって多くの編纂者が説話を主観的、恣意的に改めたことに注意を向ける必要があります。『嶺南撫怪』の編集者は「男尊女卑」的な封建思想を持っていた人らしく、亡くなった夫が蔓に化身にするのに納得できず、恣意的に改めました。また、現在の人々は、蔓に化身した妻が檳榔の木に化身した弟に巻き付くのが納得できず、弟を石に化身させました。

ベトナムの結婚式、葬式などで檳榔とキンマを噛むようになった由来は、この話に見られます。

一―三 婿取婚の習慣

婿取婚について初めて記載された本も、『嶺南撫怪』です。それについて語る「金亀古伝」は、以下のような話です。

アンズオン
安陽王は、文郎国第十八代雄王の娘との結婚を拒まれた蜀王の孫の蜀汗で、紀元前三世紀に文郎国を倒してアウ・ラク甌貉国を建てました。王は金亀の助けにより、コーローア（ハノイの郊外）に築城し、金亀の爪で神弩を作りました。南越のチエウタ趙陀（南越初代の王）がアウ・ラク国に侵略しましたが、その神弩のために敗退しました。趙陀は安陽王と和解したふりをし、息子の仲水に王女媚姝へ求婚させました。安陽王は趙陀の姦計に気づかずに結婚に同意し、吉日を選んで結納を受け、婿取婚式を行いました。仲水は妻をそそのかして、神弩を偽物に交換させました。また、「万一、両国間に戦争が起こつたらどうするか」と仲水が妻に聞くと、妻は「分らないが、そういうことが起こつたら悲しくなる」と答えて泣きました。仲水は妻に、「鵝鳥の羽毛で作った衣を着て行き、鵝鳥の羽毛を抜いて道にしるしをつけてください」と教え、「両親を訪ねる」と言つて帰国しました。趙陀は神弩を持つてアウ・ラク国を侵略し、安陽王を破りました。安陽王と娘が海まで逃げたとき、金亀が現れて娘の過失を告げると、王は娘を斬り、金亀に導かれて海に消えました。娘の血を貝が吸い、真珠となりました。仲水は道に鵝鳥の羽毛のしるしを追い、海岸で妻の死を嘆き、コーローア城の井戸に身を投げました。（抄訳）

このような悲しい情愛の話は、後世の人々を憤らせたり、悲しませたりしますが、神弩が失われ、国が破られた理由は趙佗の姦計です。説話は、娘と仲水の二人が、父親である趙佗の文郎国への侵略意図の犠牲者にすぎないと語り伝えています。

ベトナムには昔から、婿取婚という習慣があります。いつから始まったかは分かりませんが、この話はベトナムの歴史書『大越史記全書』の「外紀」にも見られますし、また、ハノイの郊外では「コ・ロア (Co Loa)」という、この話に関連する歴史遺跡も残されており、紀元前三世紀ごろには婿取婚の習慣があつたと考えられます。現在も、ベトナムと中国の国境に住む少数民族の間では婿取婚の習慣が残っています。また、『嶺南撫怪』の「一夜沢伝」、「檳榔古伝」説話にも女性が男性に直接求婚するという話が見られるように、ベトナムでは昔も今も、婿取婚が行われています。

研究者によると、日本にもこの習慣がありました。石井研士氏は、「源頼朝は養女にした姪の藤原義保女の結婚が決まったときに、慣例と異なり娘の献上を申し出ている。結局は公家の伝統を主張する関白藤原兼実にしたがって婿取婚となった」と述べています。『日本霊異記』上三十一および『今昔物語集』卷十六第十四話には、婿取婚の習慣が見られます。「聖武天皇の代、吉野山の修験者御手代東人が観音に財貨と美女を祈願し、冥慮にかなつて、粟田の三位の娘の病気を治癒して妻とし、その死後は妹を妻としておおいに富み栄え

た話」のように、当時、貴族の娘が結婚するときには、夫が妻の家への帰属を容認することと妻の家の財産を得たことを明らかにしました。

また、嫁取婚への移行については、石井氏が「一般社会が封建的主従制の影響を受け、夫の家への妻の帰属を容認しはじめたことによるものである」と述べたとおりで、ベトナムでも後には、嫁取婚が主流になりました。

一―四 ベトナムの伝統的な結婚式事情

(一) 仲人の役割

昔、ベトナムでは「男女授受不親」(つまり、男女は直接交流することができない)という観念がありましたので、伝統的な結婚式は日本と同じく、仲人が大切な役割を担っていました。結婚が本人の意思によって決定されるものではなく、当初から第三者による仲介の結果となると、当然、仲人の存在は重要になります。今ではほとんど恋愛結婚となっていますが、昔は仲人が必要でした。ただ日本と違って、ベトナムの仲人は結婚式後、新夫婦と深い関係を保つことはなく、新夫婦の指導者、後見人としての役割もありません。“*Jâm mới tôi nâm không*”「仲人がたくさんいても、結局、一人寝になる」(つまり、何回も仲人に紹介してもらったが、結局結婚できなかった)という諺があるように、結婚式後は、仲人の

役割に特に重要なものはなかったのです。

(二) 結婚と家柄

ベトナムの伝統的婚礼には、「門当戸対」という観念があります。つまり、上流の者は上流の者と結婚し、また下流の者は下流の者と結婚するということです。「*Nôi trôn icip vung trôn, nôi mêu icip vung mêu*」 「丸い鍋には丸い蓋をかぶせ、曲がった鍋には曲がった蓋をかぶせる」という諺があるように、上流の者は絶対に下流の者と結婚することができませんでした。また、上流の者と結婚した下流の者は、「*Đũa móc mà chôi mâm son*」 「黴の生えた箸を朱塗の盆に置く」とたとえられました。

(三) 婚礼の日取り

ベトナムの結婚シーズンは、夏季を除く、春、秋、冬です。特に十月から十一月までが、結婚式が多い月でした。これに対して日本では、十月は神無月といって、結婚式を挙げることが少ない月でした。

(四) 結婚式

昔の結婚式は、身分によって様式に違いがありました。上流の者の結婚式であれば、婚礼の当日、花嫁は婚家からの迎えを待って実家の門内から駕籠に乗り、婚家に向かいました。庶民の結婚式であれば、婚礼の当日、花嫁は婚家から迎えにきた花婿と一緒に、実家

の皆と婚家に歩いて行きました。さらに、「駕籠に乗り婚家に向かう」という民謡があるように、昔は庶民も駕籠に乗り、婚家に向かう習慣があったかもしれません。

結婚式が行われる前には、占師に吉日を占ってもらいました。また、婚礼の当日、花嫁が実家から婚家に向かう途中で、子どもたちがお金を要求するために道に紐を張り、行列を阻止することについては、『雨中随筆』に詳しく書かれています。“Nuôi lợn thì phải vót bèo, Lầy vợ thì phải nộp cheo cho làng” 「豚を飼えば餌として池の水草を採るように、結婚する時は村にお金を納める」という歌謡があるように、道に紐を張って行列を阻止することに代わり、娘が嫁に行く時には、村にお金を納めるようになりました。ほとんどの場合は、納められたお金で村に道をつくりました。また、山地に居住している少数民族の中には、日本と同じく、昔、婚礼の際に花嫁を略奪する儀式を行っていた民族もありました。

地域によって習慣に違いはありますが、たいてい、結婚式が行われるのは午後でした。同じ村人同士の結婚が多いため、婚礼の当日、婚家に迎えられた花嫁はいったん実家に戻り、夜八時ごろ、もう一度婿の家から三人ぐらいで迎えに行きました。また一部の地域では、自由恋愛の習慣がなく、新婚の夜、新夫婦が恥ずかしくないように、また、無事に子どもが授かるように、五、六歳ぐらいの男の子と一緒に床入りする習慣もありました（ハノイ省、ドンアン県、ツクテュー社、ギョクロ村）。当日、新夫婦のために、息子と娘が両方

揃っている夫婦の妻に来てもらい、床に畳を敷いてもらう習慣もありました。

ほとんどの場合、伝統的な結婚儀礼を司るのは本家の者ですが、権力者を選ぶこともあります。結婚式は、花嫁花婿両家だけではなく、村をあげての一大行事ですので、近所の主婦も準備に加わり、赤飯を炊き、祝料理を用意します。両家では、結婚のお祝いにくる客(村人と遠来の客)のために、盛大な宴会を催します。もちろん、客は祝いの品を持参して、主家に贈りました。昔からお祝いで一番多かったのは米でした。主家は忘れないように贈られた品をメモして、次にその人の行事(結婚式、お葬式、家を建てるなど)があるときにまた同じお祝いをもって、返礼しました。現在では、お祝いにお金を贈ることが主流となっています。

(五) 適齡期

ベトナムでは、昔はたいてい十五歳から十六歳ぐらいで結婚しました。これは現在の平均結婚年齢二十四歳と比べると、かなり若いです。ベトナムのような農業が中心の国では、多くの労働力が必要ですから、早めに嫁ぐと農業の生産に有利だと一般的には考えられていました。

(六) 「多妻」制度

“Chém cha cái kiếp lấy chồng chung, Kê đắp chăn bông kê lạnh lòng” 「諸人の仮となる」と

いうののしりは一体どういうことであろうか。夫と同じ布団で寝る者がいれば、寒い一人寝の者もいる」（つまり、多妻の夫は妻たちに対して平等でないことを批判している）という歌謡のように、ベトナムにも「多妻」という制度がありました。もちろん現在は、この制度はなくなっています。

以上、ベトナムの結婚式について見てきました。次に、ベトナムのお正月の習慣についてお話ししましょう。

二 『嶺南摭怪』 「チュン餅古伝」から見たベトナムの正月

二一 粽と餅の縁起

ベトナムの正月のお祝いは旧暦の新年、西暦では一月か二月に行われます（今年の元旦は一月二十三日でした）。大晦日と新年の三日間は、「テト」（正式にはテト・グエン・ダン（元旦節）と呼ばれます。テトはキン族（ベトナム人）の最も重要な祭日で、家を離れている人もテトの際には必ず帰省します。ベトナム人は半月前からテトの準備を始め、互いにテトの贈り物をし合います。テトのころに開かれる花市場は、ベトナムのテトの象徴です。よく飾られるのは桃の花です。家庭では、大晦日の深夜に旧年の神様を送り、そのまま新年の神様を迎えるパーティーを始め、年が明けると三日間、毎日お祝いのパーティーを行

います。

新年のお祝いの家庭訪問（年始回り）もベトナム人の習慣で、元日の朝は祖先をまつる祠堂と長男の家に行き、祖先の祭壇に線香を供えて新年のお祝いをします。そしてテト向けの特別な料理を食べ、午後には親戚や友人の家を互いに訪問し合い、新年の幸運を祈る挨拶を交わします。

テトの際に欠かせない食べ物は、バンチュンという粽ちまきと餅です。バンチュンと餅の話が初めて記載された本も、『嶺南撫怪』です。「チュン餅古伝ビン」を見てみましょう。

第六代雄王がベトナムを治めていた時、譲位のために、二十一人の皇子の中から後継者を選ぶことになりました。選出の条件は、珍しい食べ物を探し出すか、あるいは自分でご馳走を作るかして、年末に祖先に供えるというものです。皇子たちは、父王の言葉を聴くと、先を争って珍しく価値ある食べ物を求め、従者を四方に走らせました。山でも海でも、珍しい食べ物があると聞けば、あらゆる手段を使って手に入れようしました。

二十一人の中で第十八番目の皇子郎僚ランリョウは、幼い時に母を亡くし、孤独な日々を送っていました。供え物の期限は間もなく近づいていましたが、ランリョウはまだ何も手



粽



御餅

に入れていませんでした。どうすればよいか困っていると、夢に神様が現れ、「天下で一番貴重なものは米です。米は人間の食料として欠かせないものです。米を食べると元気になり、毎日食べても飽きることなく、他のものとは比べられません」と言いました。また、「天と大地の姿を表すために、もち米を用いて四角い粽と丸い餅を作ってください。父母の恩義を表すために、青い葉にもち米と珍しい食物を入れて、包んでください」と教えてくれました。ランリヨウは神に教えられた通り、四角い粽と丸い餅を蒸して作り、約束の日に供えました。他の皇子たちはたくさんのご馳走を供えましたが、ランリヨウは二品しか供えませんでした。王が驚き、理由を聞くと、ランリヨウは具体的に夢の話をしました。王がランリヨウの粽と餅を食べてみると、いろいろな味があつて美味しく、しかも飽きなかったので、王はランリヨウを選んで、王位を



粽の原料は、森の葉（ラーゾン）、もち米、豚肉と青い豆

譲りました。それから年末には、皆が粽と餅を作って祖先に供え、正月料理とする習慣になりました。

（抄訳）

ベトナムは農業生産を中心とする国ですから、この話のように、昔から米を大事にしてきました。円餅は天を、粽は大地をかたどり、青い葉に包んだもち米と珍珠は父母の恩義を表し、祖先の霊と年神に供えるものとして欠かせないものと考えられます。同じ農業国でも、日本人の考えは少し違っていて、日本人は昔から、人間の霊魂は穀物の霊魂と同じと考えていましたから、丸めたご飯は霊魂をかたどったものとして、農具の箕の上のせて祖先の霊と年神に供えました。⁽⁶⁾

二一二年木の縁起

ケイネエウ

日本で門松を立てるように、ベトナムにも年木を立てる習慣があります。ベトナムには



年木を立てる習慣もあります

松が少なく、竹がたくさんありますので、年木には竹が使われます。年木の縁起は『嶺南撫怪』などの漢文説話には書かれていませんが、昔話には見られます。それは以下のようなものです。

昔、鬼がたくさんいて、土地は全部鬼に所有されてきました。人間は田圃がないので、仏に鬼から土地と田圃を取り返すように教えてもらいました。人間は鬼と契約して、土地に竹を立て、竹の上に袈裟をかけました。袈裟の陰の広さが人間の土地になるという契約です。仏が袈裟の陰を海まで広げました。土地を失くしてしまった鬼は、怒って人間と戦うようになりました。人間は仏に教えてもらって、竹の葉（パイナップルの葉）、にんにく、石炭の粉など鬼が怖がる物を準備して、鬼が来るとそれらを投げつけました。鬼は怖がって逃げましたが、年に、一、二回、海から陸地が上がって、鬼の祖先の墓を訪ねることを認めてくれるよう、仏に願いました。それで毎年、一年の初めに鬼が来るようになりました。人間は害をうけないように庭

に竹を立て、竹の先に土の磬（古代の打楽器）を付けました。風が吹くと磬の音が鳴り、鬼はその音を聞くと逃げていきました。（抄訳）

このように、ベトナムで一年の初めに竹を立てるのは、鬼を防ぐためなのです。また、石炭の粉を播く代わりに、年末に家を掃除するとき、家の壁に石炭の粉を水で溶いた石炭水を塗る習慣ができました。“Thịt muối dưa hành cầu đời đỏ, Cây nêu trảng pháo bánh chưng xanh” 「塩肉、漬物、対連、年木、爆竹、青いちまき」という歌謡にあるように、お正月には年木が不可欠でしたが、現在では、爆竹が禁止され、竹を立てるのもあまり見かけなくなりしました。

日本では、「一年の初めにその年の豊作と家族の幸福を約束してくれる年神が山から下りてくるときにまず、目標とし、それぞれの家に入る前にいったんとまってもらうための「依代よしろ」として、松が立てられます」。ベトナムの昔話で日本と比べると違ふのは、「一年の初めに竹を立てるのは鬼を防ぐため」ということです。しかし、ベトナムでも大昔から、神霊は大樹に憑依するとされてきました。当時何か異変が起きると、大樹に憑依した神霊が必ず降臨して、お告げを行いました。また、人間と妖怪とが出会う場所も、樹の下が多いといわれています。ベトナム人は鬼神が木に宿ることを信じており、ベトナムの漢文説

話には、木に宿る鬼神の話が少なくありません。しかし、年神と祖先がお正月に年木から降りて家に入るといふ類の話は、ベトナムの漢文説話にはまだ見られません。

以上、ベトナムのお正月についてお話ししました。次に、ベトナム人が大事にしているお葬式についてご紹介いたします。

三 ベトナムの葬式

三一― ベトナムの諸家礼に見る葬式

人間は生まれてきて、必ず死ぬものですが、昔から今に至るまで、葬式は誕生の儀礼よりも大切にされてきました。ベトナム人が一七三八年に編纂した『胡尚書家礼』（漢喃研究院図書番号 AB.592）の序文には、以下のように述べられています。

「父母が生きているうちは葬礼を見るべきではないという考え方が根強い一方、実際に死に臨んでから家礼を慌てて読んでも間に合わず、不孝として笑われます。父母の恩に報いるためには礼書を読まなければなりません。礼書を読まなければ、礼を知ることができません」。このように、葬式は大切に扱うべきとされています。（適訳）

これまでもベトナムの葬式について研究する国内の研究者はいましたが、漢字が読めないという理由で、残された資料を直接利用できず、いまだ十分な研究には至っていませんでした。最近、慶應義塾大学の嶋尾稔氏が、ベトナム人が編纂した諸家札を検討し、「ベトナムの家札と民間文化」という論文を書きました⁽⁸⁾。著者によると、漢喃研究院が所蔵する文献の中に、ベトナムの葬式について記された資料が三種類あります。『胡尚書家札』と『捷徑家札』(AB.572)、それに『寿梅家札』(AB.592)です。嶋尾論文の内容をまとめると、まず、「家札に基づく葬礼の複雑な規定をベトナム人にも理解しやすくするためにその一連の行事に関する諸規定を字喃表記のベトナム語で記述した」ということ。「夫に先立たれた母や妻の父母に対する服喪に関して中国の家札とは異なる規定が見られ」、また、十八世紀後半に刊行された『寿梅家札』は「改葬に関して風水説を引用して墓が子孫に不幸を引き起こしているとみられる場合に改葬するように指示を与える」ということ。十九世紀には、『胡尚書家札』と『捷徑家札』は姿を消し、村の知識人たちに歓迎された『寿梅家札』のみが普及する⁽⁹⁾などです。

現在、農村部では漢字の読み書きができる人は少なくなり、葬式の儀礼や次第は村の専門的な呪術師、霊媒師に教えてもらう場合がほとんどです。年長者から教えてもらう場合もあります。また、昔の葬式とは少し違う内容も見られます。

私は葬式を研究する者ではありませんが、嶋尾先生の依頼で、家礼にある字喃テキストを現代ベトナム語に翻訳したことがあります。また、二〇一一年五月八日にベトナム社会科学院東北アジア研究院において、専修大学の嶋根克己氏が「日本人のライフエピソードと葬祭業」というテーマで発表したパワーポイント資料を、東北アジア研究院のゴ・フォン・ランさんからいただきました。嶋根氏の発表資料には「日本の葬儀の変化と葬祭業者の登場」という項目があり、「ベトナムでみた葬儀」について述べられています。嶋根氏は、日本とベトナムの葬儀を比較すると、「女性たちが参加者のために食事を用意することなど、ベトナムの田舎の葬儀とよく似ている」と述べています。また、「最近日本で注目を浴びた映画に「おくりびと」がある。この映画は日本ではじめてアメリカのアカデミー賞を受賞したことで話題になったが、何といても注目されたのは、この映画の主人公が葬儀業者であった点であろう。これまで日本では、葬儀業者というのは誰もやりたがらない仕事、あるいはどこかいかげんか仕事と考えられてきたからである（今でもそう考える人たちがいる）。しかし、この映画では、主人公が自分の仕事の重要性に見覚え、専門的な職業人として他者の死後の始末をすることに誇りを持ち始めていく。どうでしょう。ベトナムにはこのような人たちは存在するのでしょうか。あるいはそういう人たちの生き方が映画に描かれることはあるのでしょうか」、「この映画では、お葬式のやり方を知らない

都会人が、突然の葬儀を取り仕切らなくてはならないという点が、話題の中心です。自分の親のお葬式の仕方を知らない子どもたち。あるいはなぜ故郷の人たちが手伝わぬのかと、不思議に思いませんか」と問いかけています。

私は今まで、嶋根先生がベトナムの葬式に興味をもつ理由がわからなかったのですが、今では嶋根先生の指摘にとっても関心があります。そしてベトナムの葬式について、民族学的方法で写真や文章として記録したほうがよいと思っています（ベトナム社会科学学院の民族研究院が葬式に関する研究論文や書籍を所蔵しているかもしれませんが、嶋尾氏の参考文献には見られません）。このような理由から、以下では、親の葬式を中心としたベトナムの葬式について紹介したいと思います。

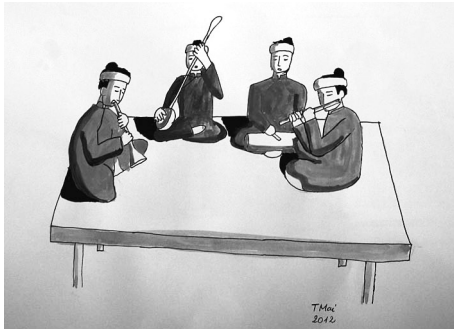
両親が亡くなった場合、喪主は長男が務めます。男子がいない家庭では、男性の親族または女性が務めます。葬式の日取りは、占い師に占ってもらいます。入棺式では、遺体を沐浴させるために生姜湯を沸かし、その湯にタオルを浸して遺体を頭から拭き、新しい衣服を着せます。ベトナムでは土葬がほとんどですから、改葬するときに手足の指の骨が失われぬよう、手袋、靴下のような丈夫な衣をはかせます。また、死者が眠っているのかのように化粧を施します。次は飯含式で、裕福な家族は遺体の口にお金を含ませます。昔の規定では、男性は七ドン、女性は九ドンでした（現在は自由です）。これは、男性には三つ

の魂、七つの魄があり、女性には三つの魂、九つの魄があるという観念によるものです。貧しい家族は、お金の代わりにご飯を含ませます。飯含式には、死者の霊が幽冥で餓えないように、という願いが込められています。お棺には、毎日の生活に欠かせない日用品、たとえば、筆、眼鏡、米、塩、鍋、小銭などを入れることもあります。また、防臭と体液吸収のために、棺底に焙じた茶葉を敷きます。

次に「招魂」（魂を呼ぶ）式を行います。遺体を入棺する前に、長男（喪主）は屋根に登り、亡くなった父あるいは母に「お父さん／お母さん」と三度呼びかけます。呼びかけると遺体が蘇ることがあるとされているからです。

遺体を棺に納めるとき、「寅、申、巳、亥、四行衝」という諺があるように、死者の親類（子どもも含む）と、死者と同じ生まれ年（および相克年生まれ）の者は、棺のそばに立つことができません。納棺後には、「魂帛」（霊床）を設けます。魂帛は、白絹布を用いて作った神の「依代」です。埋葬まで、棺は家に置かれます。棺前には遺影、香炉、灯火、生花などが供えられます。

喪服として、親族は哀悼の意を示すために粗衣を着ます。父（夫）の葬儀では、娘と嫁は全員白いガーゼ地の粗布の貫頭衣をかぶり、バナナの茎を紐にして締めます。息子は娘や嫁と同じ衣服を着て、さらに藁を注連縄のように頭に被り、竹をつけ、白布で鉢巻きを



八音

締め、背中に布の先を垂らします。親戚であれば、白布の先を短めにします。親戚の姪と甥であれば、白布を丸く包みます。父方の曾孫は黄色、玄孫は赤色です。

棺の上には、ご飯とゆで卵を盛った茶碗に、死者の持ち物として区別するため、ささら状にむいた箸を刺して載せます。息子（喪主）は棺の前に立ち、弔問客に答礼します。娘と嫁は棺の左右に座って泣きます。弔問客は、団体であれば花輪とお金を供えます。個人

であれば、お金を供えます。昔の供え物は米が多かったのですが、最近では米の代わりにお金を供えるようになりました。喪主の家族は弔問客の供え物をメモします。農村では、弔問客に供え物を返すべきとされているからです。

通常は、一晩の通夜の後に出棺します。仏教徒の葬列は、先頭にバーヴァイという僧衣を着た在家女性たちが「南無阿弥陀仏」と記した旗を掲げて歩き、次いで「八音」の楽団が音楽を奏でながら歩きます。さらに親族が、花輪や「千秋永別」、「仙景間遊」などと記された旗を掲げて歩き、棺の前では、長男（喪主）が後ろ向きに歩きます。



ベトナムの葬式における八音

棺の後ろに家族と親戚、友人、隣人などが続きます。

三一二 『今昔物語集』から見たベトナムの葬式

ベトナムの葬式において一番大切な儀式は、「八音」という特別な音楽です。楽器は太鼓、笛、ギター、二弦の琴、カスタネット、ラッパ、一弦の琴などです。遺体を棺に入れる儀式の後、葬式の演奏を行います。演奏は埋葬が終わるまで続きます。

葬式に関する記載は『寿梅家札』に見られますが、漢文説話には詳しく記されていません。日本の『今昔物語集』には、ここで取り上げた葬式と演奏の表現と共通する話があり、ここで取り上げた葬式と演奏の表現と共通する話がある。『今昔物語集』巻二十七第三十六話は、「西国より徒歩で京に急行した男が播磨国印南野で葬送に出会い、墓中から怪物が出てきたのを鬼かと思つて切り倒したところ、何とそれが大野猪だった」という話です。そこに葬式についての文章があります。「夜ふけのころ、はるか西の方からたくさんの人が鉦を叩き、念仏を唱えながらやってくる音がかすかに聞こえてきた。男はひどく怪しく思い、その方角を見ると、多くの人が松明を



『今昔物語集』における楽人
 (正宗敦夫編『舞圖 信西古樂圖』
 日本古典全集刊行會、1929年より)

たくさんともし連れだつてやつてくる。なにか多くの僧がいて、鉦をうち念仏を唱え、多数の俗人たちと一緒にやつてきているのだった。しだいに近づいて来るのを見て、何だ葬式の行列だったのかと思つていろいろうち、この男のいる小屋のすぐそばにまつすぐやつてきたので、気味悪いことこの上ない。(中略)葬式はすっかり終わった。その後また、鋤、鍬などをもつて下人共が数知らずやつてきて、見る見るうちに墓を作り、その上に卒都婆をもつてきて立てた。すぐにすつかり作り終え、その後みな帰つて行つた⁹⁾。当時の日本人の葬式の始終、出棺からお墓を作り、卒都婆を立て終えるまでを描写する話です。また、

「人を葬る場所は前もつてその準備がしてある」と書かれてるように、埋葬の前に小屋や墓を建てるなど、葬式の前に準備することもありました。当時の日本の葬式は、現在のベトナムの葬式とほとんど同じです。ただ、一部の少数民族を除いて、ベトナム人のキン族では、小屋を作る習慣はなくなりました。

ベトナムでは人が昏睡状態に陥って、なかなか死なないと、僧に頼んでお経を読んでもらう習慣もあります。『今昔物語集』巻十五第二十三話に、似たような話がみられます。丹波国の聖人は極楽往生を切望するあまり、年ごとの大晦日に弟子を阿弥陀仏の使者に立てて聖衆来迎を得、ついには極楽往生を遂げたという話です。その話に、次のような文章があります。「いつしか迎講の日がきて、儀式など大変美々しく始まると、聖人は香炉に香をたいて娑婆になぞらえた場所にすわっています。人の扮した仏がしだいに近づいておいでになると観音は紫紺の台を捧げ持ち、勢至は天蓋をさしかけ、天の伎楽の場札は鶏妻子を前にして妙なる音楽を奏し、仏に従ってきます。(中略)その時聖人は息絶えて死んでいたのです⁽¹⁰⁾」。さて、現在の日本では、葬式の際にはどのような音楽が演奏されるのでしょうか。

まとめ

はじめに述べたように、ベトナムの古典文学とは、漢字・字喃で書かれた古い文学を意味します。つまり、ベトナム古典文学は、漢文文学と字喃文学とに分けられます。現存する古典文学史料は、主に漢喃研究院の図書館が所蔵しています。ベトナムの古典文学はベトナム民族の文化的生活のあらゆる側面を映し出すため、そこからは檳榔を噛む習慣、檳

椰を結婚の結納として採用する習慣、正月の料理として粽と餅を食べる習慣、さらには午睡をとる習慣などのベトナム人の具体的な生活を読み取ることができません。日本と同じく、ベトナムでも昔は結婚する前に仲人が必要でした。正月の代表的な食べ物餅ですが、円餅の意味は、ベトナムと日本では少し違いました。また、現在のベトナムでの葬儀と類似したものが『今昔物語集』に見られるのは、中国、インド文化という共通の根を、ベトナムと日本が持っているからです。今回、日本人および外国人研究者の研究業績を把握するには至りませんでしたので、今後補習したいと思います。また、このテーマについて、今後、ベトナムの研究者だけではなく、諸国の研究者がより広く協力し合うことができれば、漢字文化圏についての新たな認識が得られるものと期待しています。

注

- (1) 「俗語・歌謡」『ベトナム人の民間文学総集』（社会科学出版社、ハノイ、二〇〇二年）。
- (2) 馬淵和夫ほか校注・訳『今昔物語集』一一四（秋山虔ほか編『日本古典文学全集』二二―二四、小学館、一九七一一―一九七六年）。
- (3) ファン・ジン・ホー (Pham Dinh Hồ) (一七六八―一八三九)。『雨中随筆』（漢喃研

宛院図書番号 A.1279)。編纂された年代は不明。

(4) 「檳榔子を細く切ったもの、あるいはすり潰したものを、キンマ（コシヨウ科の植物）の葉にくるみ、少量の石灰と一緒に噛む。場合によってはタバコを混ぜることもある。しばらく噛んでいると、アルカロイドを含む種子の成分と石灰、唾液の混ざった鮮やかな赤や黄色い汁が口中に溜まる。この赤い唾液は飲み込むと胃を痛める原因になるので吐き出すのが一般的である。ビンロウの習慣がある地域では、道路上に赤い吐き出した跡がみられる。しばらくすると軽い興奮・酩酊感が得られるが、煙草と同じように慣れてしまうと感覚は鈍る。そして最後にガムのように噛み残った繊維質は吐き出す」(Wikipedia (ja.wikipedia.org/wiki/ビンロウ)より)。

(5) 石井研士『結婚式幸せを創る儀式』NHKブックス、二〇〇五年。

(6) 岩井宏實『日本の年中行事百科』河出書房新社、一九九七年、一八頁。

(7) 同右。

(8) 嶋尾稔「ベトナムの家礼と民間文化」（山本英史編『アジアの文人が見た民衆とその文化』慶應義塾大学言語文化研究所、二〇一〇年）。

(9) 馬淵和夫ほか校注・訳『今昔物語集』四、一三四頁。

(10) 馬淵和夫ほか校注・訳『今昔物語集』二、九四頁。

参考資料

- 石井研士『結婚式幸せを創る儀式』NHKブックス、二〇〇五年。
- 岩井宏實監修『日本の年中行事百科』河出書房新社、一九九七年。
- 宮田登『冠婚葬祭』岩波新書、一九九九年。
- 柳田国男監修『民俗学辞典』東京堂出版、一九五二年。
- 大間知篤三『婚姻の民俗学』岩崎美術社、一九六七年。
- 高群逸枝『日本婚姻史』至文堂、一九六三年。
- 伊藤一男「結婚」山中裕・鈴木一雄編『平安時代の儀礼と歳事』至文堂、一九九四年。
- 小峯和明編『今昔物語集』を読む』吉川弘文館、二〇〇八年。
- 桜井由躬雄・桃木至朗編『ベトナムの事典』同朋舎、一九九九年。
- 小松和彦『いざなぎ流の研究』角川学芸出版、二〇一一年。
- 桜井徳太郎『民間信仰』塙書房、一九六六年。
- 竹田旦『祖霊祭祀と死霊結婚』人文書院、一九九〇年。
- 柴田実『中世庶民信仰の研究』角川書店、一九六六年。
- 説話と説話文学の会編『説話論集』第一集、清文堂出版、一九九一年。

発表を終えて

私が初めて外国人研究員として来日したのは1993年、東京大学東洋文化研究所での一年でした。帰国してからは社会科学院漢喃研究院に戻り、ベトナムの漢文説話と日本の説話を引き続き研究してきました。2005年にハノイ師範大学で博士の学位を取得した後も、ベトナム・日本・中国の三ヶ国における漢文説話の比較研究を続け、さらに数年前からは、文学以外の、おもに文化人類学の角度から、三ヶ国の古典文学を探ってきました。そして昨年（2011年）、日文研の外国人研究員に着任し、一年間を過ごしました。受け入れ先である国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学の小松和彦教授をはじめ、他の日本人専門家のご指導を受けながら文献研究や資料調査を行うことを通じて、日本の説話における鬼神の世界について研究してきました。日文研での研究テーマは、ベトナムと日本の民族・習慣・信仰の研究でした。

今回、日本古来の政治、文化、宗教などの中心地京都で、市民の皆さんを前に「ベトナムの習慣と信仰を古典文学に探る」というテーマでお話することができて、たいへん嬉しく思っております。発表したように、日本のお正月の飾り門松は、ベトナムの昔話のものとは少し異なりますが、両国の漢文説話では大昔から、神霊が大樹に憑依するという観念を共有してきました。また、当時は何か異変が起きると、大樹に憑依した神霊が必ず降臨して、お告げを行ったものでした。人間と妖怪とが出会う場所は樹の下が多く、ベトナム人は鬼神が木に宿るということ信じています。両国の漢文説話には、木に宿る鬼神の話が少なくありません。今後は、両国の説話から人々の信仰について研究していくつもりです。また、日本の『今昔物語集』には、ここで取り上げたベトナムの葬式における演奏の表現と共通するものがありますが、説話から両国の文化を理解するうえで、その研究に一層努力しなければならないと思います。

今回の講演に熱心に耳を傾け、多くの質問をし、ベトナムと日本の習慣・信仰の異同に大きな関心を示してくださったご来場の皆さんに感謝します。また、京都市民の文化活動に対する関心の高さにも感心させられています。日文研で研究する外国人研究者の研究成果を京都市民に紹介するという日文研フォーラムは、本当に有意義な活動だと思えます。当日はコメンテーターとして助言いただくとともに、客席からの質問をまとめてくださり、今回の発表原稿についてもいろいろと貴重なご意見を賜った小松和彦教授にお礼を申し上げます。また、今回の発表で多くのご協力をいただいた研究協力課の皆さんにも感謝しております。今後ともこのような交流が維持されていくことを期待しております。



NGUYEN THI DANHI

日文研フォーラムの過去の開催一覧ならびに報告書の全文は、
日文研のホームページでご覧いただけます。

<http://www.nichibun.ac.jp/event/archive/forum.html>

発行日 2012年9月20日

編集発行 国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2

<http://www.nichibun.ac.jp>

© 2012 国際日本文化研究センター